



ナラテイヴ・アプローチ

道德科学研究センター人間学研究室客員教授

竹内啓二

そもそもナラテイヴとは何で

しょうか。ナラテイヴは英語で narrative と書き、動詞はナレイト (narrate)「物語る」とか「話す」という意味です。ナラテイヴはその名詞形ですから「語られた物語」「身の上話」ということになります。

ナラテイヴ・アプローチをグリーフ(悲嘆)・ケアに取り入れている水野治太郎・麗澤大学名誉教授は、人間に関して、合理主義を越える手法の一つがナラテイヴであると述べています。ナラテイヴ・アプローチに立てば、何が生じたかという事実内容より、その出来事をどう理解して語ろうとしているか、その語り方に問題の中心が

見られると指摘しています。

ナラテイヴ・モードと 論理科学モード

ナラテイヴ・アプローチの研究におけるリーダーの一人、野口裕二氏(東京学芸大学教授)は、ナラテイヴ・モードと論理科学モードを対比させています。論理科学モードは、人が何らかの法則のもとに生きる存在であることを教えるという立場です。この点では、モラロジューも論理科学モードに入るといえます。これに対して、ナラテイヴ・モードは、人が多様な可能性に開かれた存在であることを教え

ます。ナラテイヴ・アプローチは近代科学によって排除されてきたナラテイヴという一つの形式に光を当てます。モラロジューも道德科学として、近代科学と同様にナラテイヴという形式を排除してきたのではないか、と思われるのです。

ナラテイヴ・アプローチは、例えば、患者の語りを理解し、患者の生きる世界を一つの物語として理解することが目的となります。ナラテイヴ・アプローチのめざすところは、ナラテイヴを手がかりに「現実」の成り立ちを理解し、その「現実」を患者と共に変更していくための研究プログラムです。「現実」や「事実」というものは、患者



が自分に起こったことをどのよう
に理解し、語るかによって変化する
という立場に立つのです。

一方、あらかじめ用意した理論的
枠組み(セオリー)で患者を眺めるこ

とは、専門家が用意した理論的枠組みによりケアを阻害していた可能性があります。これに対して、患者の生きる世界をもっと知りたいという思いから発せられた言葉が、ケアを大きく展開させる可能性があるので。これをモラロジの人心開発救済の場に置き換えると、モラロジの理論や原理で、苦悩している人を眺めるのではなく、苦悩している人の世界をもっと知りたいという思いでその語りを傾聴するという姿勢がナラティヴ・アプローチであると

いえます。

私たちは通常、「原因を解明し、それを除去したり改善したりすること」で問題を解決できる」という信念、あるいは世界観をもってきます。モラロジの因果律の考え方もこれに当たるといえます。つまり、不幸や苦難には原因があり、その原因となつていいる心づかいや行動を変えることで、よい方向にもつていこうとするわけです。そうしたやり方で解決できる問題もたくさんあることでしょう。しか

し、原因探しでは一向に埒があかず、むしろ余計に問題をこじらせる場合もあります。

多様な「読み」

「私たちは、自己の人生という本の著者であり、著書であり、書評家でもある」と言われますが、ナラティヴ・アプローチでは、「ドミナント・ストーリー(支配的な物語)」と「オルタナティブ・ストーリー(もうひとつの物語)」という言葉が用いられます。「ドミナント・ストーリー」は、ある状況を支配している物語という意味で使われます。

モラロジの用語で言えば、「普通道徳」、一般的には「常識」という言葉がこれに当たるでしょう。

野口氏によれば、人は、無数の「経験」を素材に、さまざまなストーリーをつくり上げながら生きています。そして、ある「問題の染み込んだ」その人特有のストーリー(ドミナント・ストーリー)に支配されているとき、人はなかなかそのストーリーから脱出することが

できません。しかし、もともと無数の「経験」は、多様な「読み(受け止め方)」に開かれていますから、それ以前とは異なる「読み」も可能はずなので。問題から抜け出せなくなっている人には、出来事の別な読み方があってよいのだと指摘するだけでも、希望を与えることになります。

だからといって、ナラティヴ・アプローチはあらゆるドミナント・ストーリーから自由な地点をめざすべきだとは主張しません。あくまで、ある特定の状況を変えたいと思うときのひとつの手がかりを主張しているにすぎないので。

「共同制作」と「ケア的な関係」

従来のカウンセリングにおいては、「望ましい成長過程」という専門的な知識により、人を「正常な過程にある人」と「異常な過程にある人」に分類してきました。通常のセラピーは、専門家がクライエ

ントの一段上のポジションから客観的に観察し指導するような関係を前提にしています。たとえば、クライエントの主体性を重んじその援助に徹するといった場合でも、専門家こそがそれをうまく引き出すことができるという暗黙の前提がありました。それが「問題の染み込んだストーリー」をつくり上げていくのだと、ナラティヴ・アプローチによる心理療法家(セラピスト)は考えます。そして、問題を抱えた人(クライエント)の「未だ語られなかった物語」を語るために「傾聴と共感」を行います。つまり、「今までになかったものの創造」への「共同制作」をめざすのです。

ナラティヴ・アプローチが主張するのは、専門家とクライエントが共同で同じ問題に取り組むという「関係」です。モラロジの人心開発救済の場合、人との関わりにおいて、このようなナラティヴ・アプローチの「ケア的な関係」に立ち、何かを共に創造する役割を果たそうとする姿勢が求められているのです。